



ドイツで結婚契約書にサインしてはいけない理由

日本人女性がドイツ人男性と知り合い、結婚を決めるとする。そんなとき、彼は「結婚契約書をつくろう」というかもしれない。「万が一離婚することになったとき、もめたら困るから。僕たちが別れることはないから、必要ないと思うけど」と。あなたは「それもそうだ。彼は私のことを考えてくれている。どうせ離婚なんてしないから関係ない」と思うかもしれない。けれど、それは大間違い。決してサインしてはいけない。

離婚の際、なぜ揉めるのか。それはお金がある方が、別れる相手にやりたくないからである。ドイツ人と日本人がドイツで結婚する場合、お金があるのは大抵はドイツ人。ドイツの法律は弱者に十分配慮されているため、夫がつくる結婚契約書の多くは、国が保証している権利を妻に諦めさせる内容だ。

私は法廷通訳なので裁判所や公証人のところで、離婚や養育権について通訳や翻訳している。ドイツ人夫がつくる結婚契約書はさまざまだが、離婚しても生活費はやらない、財産分与はしない、年金は分けないというものから、子どもが幼稚園に行きだしたら妻は週2回、小学校に入ったら週4日働くべし、などいろいろ。仲睦まじかったのに、離婚するとなったら豹変したドイツ人夫を何度も見てきた。

「えー、こんな人だったの」と驚い

たことも一度や二度ではない。愛がなくなると、とたんにシビリアな現実が待っている。幸いドイツでは、離婚したら子どもと引き離されて母国に返されることはない。

ドイツでは、婚姻期間中に得た財産は2人の共有財産となる(贈与や遺産は除く)。つまり夫と妻の収入、購入した家や車などは2人のものであり、離婚の際は平等に分ける。離婚の原因は関係なく、浮気も、二人とも大人なのだから双方の責任と考える。日本のように浮気相手に慰謝料を請求することはできない。

離婚するには裁判が必要だ。1年以上別居し、どちらかが弁護士を通じて裁判所に離婚を申請する。離婚裁判で、法律に基づいて年金の配分を決める。子どもの親権や養育費、財産分与については離婚裁判と一緒にすることもあれば、離婚してから別途することもできる。法律や既存の判例に基づき、淡々と事務手続きをする感じである。

年金は婚姻期間に応じて分配し、財産分与は対等で、養育費の支払いも基準がある。夫が家のローンを支払い、妻と子どもが家に住み続ける判決が出ることも少なくない。妻に収入がない場合は、妻の当面の生活費も夫が負担する。

なぜ裁判できちんと取り決めるのか。妻が専業主婦の場合、夫が財産分

与をせず、子どもの養育費を払わなかったら、妻は生活できない。すると社会福祉が充実しているドイツでは、国が面倒をみななければならない。だから元配偶者がしっかり支払うよう取り計らうのである。

裁判で決められた養育費や生活費を払われない場合、国が立て替え、夫の給与を差し押さえて取り立てる。

日本人女性は、ドイツ人男性のためにこれまでの生活を捨ててドイツにやってくる。その国の法律や文化を知らず言葉もままならないから、仕事を見つけるのは至難の技。それなのに別れるとき、夫が「僕が稼いだお金なんだから、生活費はあげない、年金も分けない」というのは卑怯ではないか。

救いなのは、結婚契約書にサインしてしまっても、その内容があまりに一方的な場合は、取り消し裁判を起こすことができる。手間はかかるが、最低限の年金や財産は取り返すことができるだろう。

そもそも結婚契約書の末尾に「内容がドイツの法律に見合わないときは無効となる恐れがある」というような、一見意味がよくわからない一文がある。つまり夫は、契約書の内容が法律違反だとわかっているのだ。ドイツで結婚する際は、みなさん気をつけましょう。

ごみかんドイツ特派員 田口 理穂

AKIRA の 成長記録

16歳の明は6月終わり、半年ホームステイしていたフランスから元気に戻ってきました。すごく充実していたようで、今でもホストファミリーや友だちと毎日のようにやりとりしています。

久々のドイツですが「フランスから戻り、ドイツにすばっとはまった感じで違和感がない。たぶんまたフランスに行ったら、そこでも違和感がないと思う」と話します。それはなんとなくわかる。ドイツとフランスの日常が違いすぎるから、片方にいるともうひとつは夢のように、二つの世界がパラレルに存在しているのです。私も以前、日本とドイツがそうでした。

ホームステイ先では4、5、13歳の弟ができ、家族の一員として雨戸閉めや犬の散歩、食器の片付けなど家事を担っていました。特に13歳のEとは同じ部屋で寝起きし、すっかり仲良

しに。フランスを発つ直前の2日間、明の高校はもう夏休みでしたが、Eは中学を休み、2人で犬の散歩や映画に行き過ぎてしまいました。「明くんみたいになりたい」といわれ、明はうるうる。一人っ子なので、初めて兄のように慕われ、使命感のようなものを感じたようです。

明がフランスを発つ翌日、4と5歳の弟たちは「恋しいよー、どこいったの」とボイスメールを寄越し、犬はえさを食べなくなったそう。犬はいつも散歩に出かけていた夕方になると、明を探してうるうるし、吠えていたそうです。

フランスでさまざまな体験をし「何も怖がることはない。努力して自分ができることをすれば十分。完璧でなくていいとわかった」といいます。これまで当たり前と思っていた自分の状況を客観視できるようになり「自分が恵まれていると自覚した」とも。いろんな意味で大きな収穫を得たフランス留学でした。